
「沖縄の歴史情報研究」のプロジェクトに参加して

並木美太郎:東京農工大学工学部

高橋延匡先生から、おい並木君、明日研究室に見学が来るからデモの準備をしておいてくれないか、と頼まれた。思い出してみれば、このデモから本プロジェクトに関係させて頂くことになったような気がする。

私は、生っ粋の工学部育ちで、工学部的人間である。仮説に基づき、モデルをたて、実験によってそれを実証する。工学なので、さらに、それが「設計」という立場から、問題分析、明確な目標、それから方針をたてて実現していくことが加わる。私は、学生の頃から計算機科学・工学の分野で育ってきた。ただ、計算機科学・工学という分野は、工学の中でもかなり特異な分野かもしれない。

例えば、材料系などは、物理・化学のように自然科学的方法論に基づいて研究・開発が行われる。しかし、計算機科学・工学には、例えば、物理学のような自然科学的原理を適用できる範囲は極めて少ない。特に、私が専門としているオペレーティングシステムやコンピュータネットワークでは、道具として数学を用いることはあっても、一番大切なことは、利用者の視点である。それから、概念の創出、そしてトレードオフを十分吟味した設計が重要な内容なのである。したがって、どうしても社会科学発想と方法論に近いアプローチをとることになる。

だから、本プロジェクトのような境界領域の研究には、大いに興味がわいた。また、計算機科学・工学自身も自分たちの殻の中で閉じこもるのではなく、色々な内容を吸収してさらに新しい分野を拓いていく必要があるとも感じていたからである。

歴史はまったくの素人である。今でも古文書の字など読めない。ただ、読書が好きであったためか、読み下し文などを讀んだりするのはとても楽しい、と感じた。さらに、中身がわかればより興味を深めることもできるのだろう、と思っている。本プロジェクトでずいぶんいい勉強をさせて頂いたと思っている。また、各地での郷土料理、地酒なども今では楽しい思い出である。

振り返ってみると、歴史学の方法論も計算機科学・工学にずいぶん共通するものがある。仮説(設計目標)をたて、文献調査を行い(大量の事例を集め)、実証(実現)して仮説を検証する、といったやり方は似ているではないか、と。理論や仮説を構築することは、計算機ソフトウェアを構築する過程に通じるものがある。

歴史情報なる分野に対するアイデンティティが何か、それをどう実証していくかは、これからの課題なのだと思う。ただ、これで終わりではなく、機会があれば、また、参加してみたい、より深く追求してみたい、と思っている。

本プロジェクトでは、筆者は大した助力もできず、多くの諸先生方のご支援・ご尽力を頂きました。ここに深く感謝いたします。